と畜検査でめん羊の肝臓及び胃に見られた病変についての肉眼的・組織学的検索

○渡邉真智　神谷可菜　保科　博　平下俊治
早来食肉衛生検査所

【はじめに】北海道では全国の約８割のめん羊のと畜を行い、当所では、令和元年度で 906 頭（全道の約 21%）のめん羊のと畜検査を実施している。過去２年間、当所で実施しためん羊のと畜検査での廃棄率は、第四胃が約４割、肝臓が約３割であり、この２臓器の廃棄処分が多い。しかし、その病変の詳細については検討された事例が少ない。今回、これらの臓器について肉眼的及び組織学的検索を実施し、知見を得たので報告する。
【方法】2017 年４月～2021 年５月に寄生虫性肝炎の病名で廃棄されためん羊の肝臓 22 検体を肉眼検査により分類し、組織学的検査を行った。また、2021 年４月～５月にと畜されためん羊 233 頭の第四胃粘膜病変を肉眼検査により分類し、さらに、過去４年間に第四胃炎として廃棄されたものを含む 28 検体をこの分類毎に組織学的検索を行った。
【結果】肝臓は肉眼検査により、境界明瞭な白色充実結節が散発する病変と、白色不整形充実病巣が境界不明瞭に広がる病変に分類され、双方の内部に微小壊死病巣が認められた。組織学的検査では、双方とも、壊死巣を類上皮細胞及び多核巨細胞が取り囲み、その周囲に好酸球及び単核球が浸潤する好酸球性肉芽腫性炎であった。第四胃粘膜の調査期間中の疾病率は 52%で、内訳は①結節（粘膜に直径 0.5～1cm 大の結節が多発）45%、②赤変（粘膜全体が赤色化）24%、③白斑（平坦～噴火口状の白斑が散在）17%、④肥厚（表面粗造で粘膜全域が肥厚）14%、また、大半の個体の粘膜に糸状寄生虫の付着が認められた。組織検査では、①結節、③白斑、④肥厚に分類した病変は、粘膜固有層に好酸球浸潤がわずかに認められる単核球浸潤が主体の慢性胃炎であった。
【考察】肝臓の病変は、境界明瞭・不明瞭に関わらず、好酸球が浸潤していることから寄生虫に起因するものと思われた。第四胃粘膜には、肉眼検査により虫体が認められ、①結節、③白斑、④肥厚に分類した病変は、寄生虫性胃炎の報告と類似しており、組織検査でも慢性胃炎の所見が確認されたことから、寄生虫感染が疑われた。今回の調査により、寄生虫性肝炎として廃棄した肝臓については、組織検査により肉眼所見を裏付ける結果が得られた。第四胃については、肉眼的には様々な病変が認められたがその多くは寄生虫の関与が考えられた。今回の知見を今後のと畜検査に生かすことで、より正確な疾病情報を生産者へ還元することが可能となると考える。